

【東京】「健康な人も来たくなる面白い病院へ」医師常駐の専門部署が活動-白波瀬丈一郎・東京都済生会中央病院健康デザインセンター長に聞く◆Vol.1

2023年1月27日（金）配信 m3.com地域版

「新しい病院」をつくろうと専門部署を立ち上げ、医師が常駐して活動する珍しい医療機関がある。東京都済生会中央病院（港区）は2020年、精神科医の白波瀬丈一郎氏を招いて「健康デザインセンター」を開設した。「面白そう。でも、新しい病院って何?」。白波瀬氏がセンター長就任の打診を受けたときに抱いた疑問はさまざまな調査を経て、「健康な人も来たくなる病院」に収れんしていった。（2022年12月1日インタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら



白波瀬丈一郎氏

——東京都済生会中央病院は2020年、「健康デザインセンター」という部署を開設しました。コンセプトと立ち上がった経緯をお聞かせください。

「病院の新しいカタチをデザインしよう」——。こんなコンセプトで立ち上がったのが健康デザインセンターです。2020年に院長に就任した海老原全（たもつ）先生が母校の慶應義塾大学から副院長として東京都済生会中央病院に移った2019年、私に新部署の構想を話してくれ、「センター長に」とお誘いがありました。

済生会グループは1911年（明治44年）、明治天皇がときの桂太郎内閣総理大臣を召され、「医療を受けられないで困っている人に良い医療を提供し、再起の喜びを与えられるような施設を作るように」という趣旨の「済生勅語」を出されたことで誕生しました。当院はその4年後、本部直営の基幹病院「恩賜財団済生会芝病院」としてスタートし、初代院長は細菌学者の北里柴三郎が務めました。

「歴史ある病院の特徴を尊重しつつ、時代に合った新しい色も打ち出していきたい」。海老原院長にはそんな思いがあったのでしょうか。

——海老原院長とは過去に親交があったのですか。なぜ先生に打診が。

私と海老原院長は慶應義塾大学の同級生であり、私は精神科医として、彼は皮膚科医として大学に長く勤めました。診療科が違っていても交流はさほどありませんでしたが、私はこの間に「KEAP（キーブ）」という企業向けの復職支援事業を立ち上げて運営していたので、存在を知ってくれていたようです。

KEAPは精神科医や臨床心理士など精神医学の専門スタッフがチームをつくり、従業員1万人規模の大企業などと契約を結んで復職人数や復職者の就業継続率などの数値目標を掲げ、活動を進めました。対企業のメンタルヘルス支援サービスは世の中にたくさんありますが、私たちの取り組みはより実効性を重視しており学内で注目されました。

「従来の医療の枠に捉われない活動」は健康デザインセンターにも通ずるため、海老原院長が私に「その任を」と考えたのかもしれませんが。

——「新しい病院像を」という話を聞き、先生はどう感じましたか。

「面白そうだ」「でも、新しい病院ってどんなカタチをしているのだろうか?」といった感じです。いろいろなことに関心を持ちやすい私はすぐに「やりますよ」と答えましたが、新しい病院像はまだ描けていません。2019年の後半はどんなものを目指せば良いかずっと考えていました。

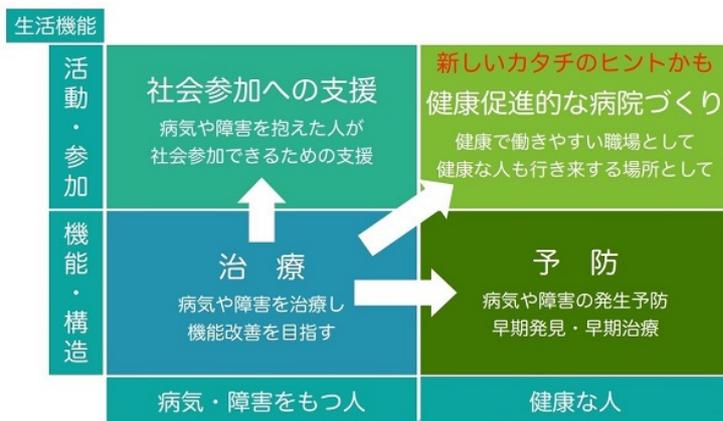
新しいことを発想する方法論を探していて出会ったのが、デザイナーの考え方や手法を活用して課題解決を目指す「デザイン思考」です。この方法の関連書籍を読み進めるなかでピンとくるものを見つけました。「戦略的経営の父」と呼ばれるアメリカの経営学者、イゴール・アンゾフが唱えたフレームワーク「アンゾフの成長マトリクス」です（下図参照）。

アンゾフは成長戦略を考える際、「製品」と「市場」の2軸を据え、それをさらに「既存」と「新規」に分けました。できた四つの枠組みにはそれぞれ異なった特徴があるため、それに応じた戦略を打つ必要があると考えました。



アンゾフの成長マトリクス（経済産業省の関連サイトから引用）

「これを医療に当てはめると良いのでは」。そう思った私は、アンゾフの成長マトリクスの「既存客」と「新規客」を「病気や障害を抱えている人」と「健康な人」に替え、縦軸にはWHOが定めた健康状態の分類法である「国際生活機能分類」を参考にし、「心身の機能・身体の構造」と「活動・参加」を設けました。すると、医療の枠組みを考えるうえで有用だと思われるマトリクスができました（下図参照）。



白波瀬氏が考えた新しい病院像を描くためのマトリクス

左下のまずは「病気や障害を持つ人の機能・構造へのアプローチ」を意味するので「治療」が当てはまります。右下は対象が健康な人になるので「予防」になり、左上は病気や障害を抱えながら社会参加するために必要な「社会活動・参加への支援」が該当します。これら「治療」「予防」「社会活動・参加への支援」は、内容の違いや質の濃淡はあれど現在の医療機関が提供しています。

「じゃあ、右上のまずは何だろう？健康な人に対して活動・参加を促すもの……。もしかしたら、これが今後の病院に求められることかもしれない」。こんなふうに考えを展開していきました。

——病院発行の広報誌に「病院を健康な人も行き来できる場所に」「来るのが楽しくなるような病院に」と書かれていましたが、そんな流れを経っていたのですね。

これからの病院は患者さんやそのご家族のためだけでなく、地域全体の健康を支える役目があるのではないのでしょうか。そのために、(1) 病院で働く人が元気になれるための環境改善、(2) 健康な人も来なくなる「成長促進的で知的好奇心を満たす刺激にあふれた病院」をつくるための活動——を私たちのミッションにしました。

WHOが健康づくりに向けて提唱する「settings approach（生活場面アプローチ）」も重要だと考えています。これは、「家や学校、職場など人々が生活する場所を健康促進的な場所にすれば、そこにいる人は自然と健康になっていく」という考え方です。これを当院で実践する、つまり、病院をもっと身近な場所にして、地域の生活の場にする。「あそこに行けばいろんな面白いことに出合えるね」と思ってもらえるようにして、当院でさまざまな刺激を受けてもらう。すると、settings approachの「自然と健康になっていく」に近いカタチを築けるかもしれません。

◆白波瀬 丈一郎（しらはせ・じょういちろう）氏

1986年慶応義塾大学医学部卒。2002年医学博士取得。1996年同学部精神・神経科学教室助手、2002年同教室専任講師。2014年同大ストレス研究センター副センター長、同教室特任准教授。2020年から東京都済生会中央病院健康デザインセンターセンター長。

【取材・文・撮影＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

